

はじまりは偶然だった。

「じゃ、お疲れさん」

トムが言い、うす、と静雄は頷く。上機嫌で家路へと向かうトムの背中をなんとなく見送ってから、夕飯どうするかな、と思った。

今日は仕事はやけに順調だった。深夜まで仕事と言うこともたびたびあるが、逆にいつになく回収がうまくいく、こういう日もたまにある。

結果、一般的な夕食の時間帯に本日分の仕事が終了して解散となった。一応は基本の就業時間が存在するが、なにしろ静雄の仕事は相手によって終業時間が異なってしまう。なので社長からその日の仕事が早めに終わった場合は事務所に連絡さえいければ解散でよし、という実にあるがたい許可を得ていた。連絡はすでにトムがいれてくれ、今日は完全に自由の身だ。

とはいえ、静雄は趣味があるわけでもないの、仕事は早く終わってもすることもない。

(久々に自炊するか)

最近では面倒で外食ばかりだったが、せっかく時間ができたことだし、たまには自炊することに決め、そのままスーパーへ向かうことにした。

池袋の街は相変わらず雑然としている。

ちらちらと視線を感じるが、いつものことなので気にもしない。売られた喧嘩は買うが、ただ視線を向けられるだけならば気にしても仕方がない。

到着したスーパーは時間の割には混んでいる印象だった。その理由を店内放送で把握する。

『ご来店いただきまして誠にありがとうございます。タイムセールのお知らせです。ただ今より特選モヤシが十円、十円、十円です。おひとり様二袋までとなります。……』

どうやらこの時間帯、このスーパーはタイムセールを行うらしい。放送はまだ続いており、卵十個入り一パックも十円だと告げていた。一瞬買おうか、とも思ったが、気分次第で朝食も作ったり作らなかったりするので、あまり使いきる自信もない。

(あー。焼きそばで良いか)

なんとなく目に入った商品を見て実に適当に夕飯が決まった。麺を手に取り、一人暮らし向けに用意されたカット済み野菜と小さめの豚肉パックを買い物かごに放り込む。他に買いたいものも思い浮かばなかったので、そのままレジに向かった。――その瞬間。

「あのっ、すみません！」

必死の面もちの少年に声をかけられた。見覚えのある顔立ちだ。

「あ？」

「あの、突然すみません。僕、えっと以前セルティさんの家でお会いしたことがあるんですけど」